

公開FDワークショップ'12 表現教育の可能性（第3回）

表現教育の可能性 ープレゼンテーション教育を通してー

師 玉 真 理

【司会（阿部）】

本日はお忙しいところ、共通教育研究センター主催の公開FDワークショップにお集まりいただきありがとうございます。

奇しくも、本日は、東日本大震災からちょうど2年という節目の日です。別にそれを意識して開催したわけではないのですが、たまたまスケジュール等の都合で本日の開催となりました。年度末という忙しい時期に、これだけの先生にお集まりいただき、感謝申し上げたいと思います。

今回のFDワークショップは、「表現教育の可能性」というテーマの第3回目となります。過去2回は、主に「書く」ことを中心とした「文章教育」「日本語教育」をテーマにしてきましたが、今回は少し趣向を変えまして、「プレゼンテーション教育」を中心に、参加されている先生方で議論をしていこうと思っています。今日は、「プレゼンテーション教育」に関する問題提起をしていただく講師として、神奈川工科大学基礎・教養教育センターの師玉真理先生をお招きしております。

師玉先生は、東京外国語大学の大学院博士課程を修了されておまして、比較文学や現代文学がご専門なのですが、現在お勤めの神奈川工科大学では、「文章表現技術」「プレゼンテーション技術」といった科目を担当されております。特

に、授業の一環として、プレゼンテーション技術に関する成果を発表し合うということで、大学の壁を超えて、他の大学の先生方と共同で、「プレゼンテーション・コンテスト」というのを自主的に発案され、企画・運営などをされています。実は、師玉先生の活動とご活躍を私も人づてに耳にしまして、成城大学でもこのような企画を立ち上げようということで、WRDの授業を対象にした「プレゼンテーション・コンテスト」を企画し、今年度まで4回開催しております。

実は、「プレゼンテーション・コンテスト」の企画というご縁もありまして、師玉先生には昨年度まで本学でWRDの非常勤講師をしていただいたのですが、本務校である神奈川工科大学で、先生が担当されている文章表現技術等の科目をより多く展開しなくてはいけないこととなり、多忙になるという理由で、こちらとしては慰留をしたのですが、一旦非常勤講師をご辞退されました。そのような訳で、今年度は本学でWRDを担当されていないのですが、師玉先生のお知恵や実践について、このような場で是非お話いただけないかということで、お忙しいところお越しいただいたわけでございます。

ということで早速、師玉先生にご講演をいただきたく存じます。では、よろしくお願いたします。

【師玉】 阿部先生、ご紹介どうもありがとうございました。

自己紹介と講演の趣旨

こんにちは。神奈川工科大学の基礎・教養教育センターというところに所属しております師玉と申します。ただいまご紹介に預かりましたように、昨年度までは、WRDでこちらにお邪魔していたのですけれども、ちょっと忙しくなしまして、成城大学ではお暇したところお声がかかりまして参りました。果たして私がここに来て喋っているのだらうかと、ちょっと逃げ腰になりながら今回お引き受けする形になったので、私でよいのかしら、というところから話していきたいと思えます。本日は何か積極的なお話をするというよりも、皆さんに私がやっていることを聞いていただいて、逆にお教を請うというスタンスで参りましたので、忌憚のないご意見をお聞かせ願えたらと思えます。よろしくお願いたします。

「表現教育の可能性～プレゼンテーション教育を通して～」という題目をいただきまして、プレゼンテーション教育を通じた実践についてお話することを承ったわけなのですが、果たして私が適任なのかと思悩んでしまうのには二つ理由があります。一つは、今日この席に、(経済学部経営学科の) 塘先生がいらっしゃるのですけれども、塘先生は大学時代の同級生で、大学1年から存じ上げているのです。先ほど、東京外国語大学の方をご紹介いただいたのですけれども、学部は筑波大学の社会工学とあって、塘先生と同じ所属のところを卒業させていただいたのですが、当時から、塘先生は非常に優秀な方で、僕は明らかに底辺の不良学生だったわけですね。その頃を一番よく知っている塘先生がいらっしゃるということで、今日ほどやりにくいことはないのです。ですので、今日は、立派なことはとても言えそうもありませんし、お恥ずかしい部分も含めて嘘も隠しもできないところで話さなくてはいけないということでやっていきたいと思います。

二つ目の理由ですが、私が不良学生だったというお話をしましたが、その頃、何故不良だったかという、私はもともと全うな研究者生活に入るような人間じゃなくて、大学時代は音楽で飯を食おうと思っていたのです。音楽といっても、見ての通りビジュアル系では全然ないので、歌手のバックでひたすら地味にベースを弾くという仕事をしようと思っていました。その大学在学中、私が師事した師匠がいて、そのお師匠さんの「ボーヤ」っていう職業と言いますか、「ボーヤ」ってご存知の方はおそらくここにいらっしゃる東谷先生くらいかなと思うのですけれども…、「ボーヤ」は芸能人の付き人みたいなものですね。そのような仕事を大学時代から始めまして、僕は2週間に一度くらいしか大学に行かなかったのです。ですから、塘先生と顔を合わせていたのは貴重な時間だったのだなということを、今思い返しているところなのです。

それで20代半ばまでずっとその音楽活動をしていたのですが、それだけでは食べられないので職を転々と始めました。フリーター状態だったこともあるのですが、とにかく職種だけはいろいろ経験しましたね。多分20職種くらいは経験しています。それで、私の履歴書を見ていただくと分かるのですが、ある意味「傷だらけ」なんですよね。この「傷だらけ」の履歴書でまっとうな仕事につけるのだろうか、30代前半は諦めていた時もありました。とにかく、そういつ

た経験を経て、30歳を過ぎてから大学院に入って研究生生活に入るというステップを踏んだものですから、全うな人文系の教育というのは受けていません。特に、今担当しているプレゼンテーション教育というのは、10年前にたまたま非常勤の空きができて引き受けた科目だったのですね。ですから、プレゼンテーション教育についても、まるっきり素人から入ったというのが正直なところです。

ミュージシャンの経験から学んだプレゼンテーション教育

ただ、自分の中ではプレゼンテーション教育は合っていたなとか、実は担当していても平気だったなと思えたのは、その時の経験があったからのように思います。「ボーヤ」をやっていた頃、師匠にくっついていろいろな所に行くのですけれども、例えば、私の師匠は…、皆さん Mr.Children はご存知でしょうか…、その Mr.Children のプロデューサーをやっている小林武史さん関連の仕事を私の師匠が当時よく引き受けていたので、例えば（サザンオールスターズの）原坊（原由子）のレコーディングだとか、小林武史本人のコンサートであるとかに付いていくわけですね。ただ、付いて行くといっても荷物を運ぶだけで、あとはずっと見ていただけなのですけれども。そもそも「ボーヤ」をやることになったのは、師匠に「師玉君、君プロになるのだったらここにいちやだめよ。」ということで、スクールを辞めて、一緒に仕事に付いて来いってことになったからなのです。その時、今思えば、師匠が見ていたのは、いろんなところに付いていった時にどうやって私が自分を売るか、自分を売って仕事をもらうためのコミュニケーションが取れるかというのを見極めるためだったのですね。実際あの時、自分なりに訓練を積めたなと思うのは、「魂を売らずに自分を売る」ことでした。人にへつらえば仲良くはできますが、それだけでは仕事はもらえないのですね。そうじゃなくて、自分のミュージシャンとしての魂を保持しながら自分を売っていく、このことは非常に難しかった記憶があります。

実は、今プレゼンテーションを教えるようになって一番役に立っているのが、この時の経験なのです。プレゼンテーションとは、基本的には人を説得することです。説得とは、物でもメッセージでも案件の場合でもよいのですが、相手に自分の何ものかを売るための表現行為だと思うのです。その何かを表現していく時

に、どういう戦略を立てるのか、いかに自分を殺さないように相手に伝えていくのか、そういった訓練を積めたという意味では、あの時の経験は、あながち無意味ではなかったなと感じています。

神奈川工科大学における日本語コミュニケーション系カリキュラムの経緯

私がプレゼンテーション教育に携わった経緯、背景については、今までの自己紹介ということでこの辺で一旦止めておきまして、本題に入らせていただきたいと思います。

まず、私が受け持っている科目についてご説明したいと思います。私が10年前に神奈川工科大学の非常勤講師として授業を担当するようになった時は、「文章表現技術Ⅰ」という科目しか開講されていませんでした。しかも1クラスしか開講されていなくて、だいたい30人から40人くらいの学生が受けに来ていた程度でした。ですから、私としては、このまま細々とこの科目の担当を続けて、どこか専任教員に採用が決まったらさよならだと思っていたわけです。ところが、翌年になると、いきなり150人に増えて、さらにその次の年には250人くらいに増えたので、クラスを増やしてもらいました。私1人では手に負えなくなってきたので、研究室の後輩に頼んで担当者をもう1人増やし、開講クラスは2クラスになりました。2クラス運営でやるようになったのですが、それでもまだ受講者が増え続けまして4クラス開講になりました。さらにその2年後には6クラス開講することになりました。6クラスまで増えたところで、2人でももう手が回らなくなって、3人、4人と担当者も増えていく状態になりました。担当者が増えていったのには履修者数以外にも理由があって、クラス数増加の延長で新規科目が開設されていったことがあります。はじめは文章表現技術ということで、基礎的なノートの取り方や大学生活をおくるために必要なリテラシーを教えていたのですが、そこからプレゼンテーション関係の科目とクラス数も増えて、全部で数百名の学生が履修するようになり、かなり大所帯になったのです。

ただ、まだ私が非常勤で担当していた頃は、情報学部という学部だけの話だったのです。情報学部は結構人数が多くて1学年五百数十名くらいいますが、その3分の2くらいの履修だったと思います。それが、これは昨年の話ですが、昨

今の大学の情勢を受けまして、うちの大学が教育改革をしよう、新しい教育体系を実施しようということで、共通基盤教育というのを始めることになりました。その際に、うちの大学もご多分にもれず学生の「日本語の運用能力、日本語によるコミュニケーションの低下」がいわれ、日本語コミュニケーション系の科目もターゲットになりまして、全学展開するという事になったのです。「文章表現技術Ⅰ・Ⅱ」と「プレゼンテーション技術Ⅰ」の科目の部分ですね、特に「文章表現技術Ⅰ」についてはスタディスキルを学ぶ科目として必修化されることになってしまいました。それ以外の科目も、単発の科目でそれらを全部体系だった形で履修できるようにカリキュラムを作ってくれという要望もあって、さらに大所帯になってしまったのです。現在、私が担当しているというか、非常勤の先生にお願いして一緒に担当している学科が、全11学科中8学科です。その8学科は必修でほぼ各学科内クラスの担当なので24クラスほどあります。このあとご説明するつもりですが、1年の後期から、スタディスキルの続きの選択科目として、「文章表現技術」というちょっとライティングに特化した科目と、「プレゼンテーション技術」というプレゼンに特化した科目があります。さらに、この先に「技術文章の書き方」という科目があります。このような特化した科目もやっていこうということで首が回らなくなってしまって、阿部先生、東谷先生にご迷惑をおかけして、成城大学ではお暇させていただくことになってしまったわけです。その他にも、私自身の専門に関係する科目は、おまけみたいにちょっとありまして、「文学」とか「比較文化論」という科目も担当しております。

日本語コミュニケーション系科目の内容

各科目の内容ですが、「スタディスキル」では、誰でも当たり前に行けると思っている授業ノートの取り方や図書館の利用の仕方、文章の読み方や実験レポートの書き方、初歩的なプレゼンテーション資料の作成方法といったことをやっております。これが1年前期の必修科目で、これを終わると1年後期から選択科目で、基礎的なライティング能力を身につける科目（「文章表現技術」）、プレゼンテーション能力を身につける科目（「プレゼンテーション技術」）をやります。「文章表現技術」については、ライティングに比重があるといってもスタディスキルの

延長線上にある科目で、「話す・聞く・読む・書く」をトータルに扱おうとする科目で、教材開発も含め四苦八苦しながらやっている最中です。そして今年から、今まであったプレゼンテーション関係の科目を継承しまして、「プレゼンテーション技術」という、実践的なプレゼンテーションについて学ぶ科目を開講しています。これはどちらかというと企業におけるプレゼンを意識した内容になっています。というのも、そもそもこの「プレゼンテーション技術」の内容というのが、私が書店でプレゼンテーション技術関連の教科書を数十冊買いこんで、それらをもとに作ったプリントがもとになっているからです。それらのプリントは、大部分が企業人向けの内容で、「これ、仕事している時に知っていたら良かったな。」ということを抜粋して作っていますので、わりと実践向きというか、大学を出てから役に立つものを意識した内容になっています。そして3年次になると、理工系の大学なので、「技術文章の書き方」といった科目ができる予定ですが、開講がまだ先ですので、内容はこれから検討する段階です。

このような日本語コミュニケーション系のカリキュラムを体系的に進めていきたいと思いますというのは、おそらく大学教育全体にそのような流れがあつて、本学は工学系の大学ですから、多分、文科省の言うことを最も優等生的に聞くほうの大学じゃないかと思うのですが、それもあつて、私を指名してこのような科目に関する仕事があると。お陰様で、私にも役目があつて、多分雇われているところもあると思うのですが、ともあれこのような状況で、今述べたような科目を担当しております。

「プレゼンテーション技術」での授業実践

さて、ようやくと本日のお話になりましたが、私が成城大学でWRDを担当していた時にやらせていただいた内容は、基本的に「プレゼンテーション技術」という科目の内容を抜粋した形で学生に教えるというか、それを幾分アレンジしたような内容の授業をしていたわけで、神奈川工科大学の内容とほとんど重なってきますので、神奈川工科大学での実践をお話しながら進めていきたいと考えております。

まず、私の勤めている神奈川工科大学の学生層についてです。先ほど「日本語

の運用能力、日本語によるコミュニケーションの低下」と説明したのですが、おそらく、先生方が成城大学で感じられているのは全然違うと思います。というのも、はっきり言ってしまうと、かなり「やばい」レベルの学生も結構いるというのが正直なところだからです。偏差値でいうと30台後半から40台前半です。要するに、文章を書かせても、中学校レベルの文章も書けるか怪しいという学生もいます。もちろんよく書ける子たちもいるのですが、学生の間にも能力の開きがありまして、全体としてみたときに、「話す・聞く・読む・書く」どれをとっても能力的に厳しいよねということです。学生自身もそういった能力が無いことへの不安もあって、選択科目であっても履修してくるわけです。そして大学でも、共通でそのような科目を全員に受けさせたいという方針が出てきて、おそらく、学生側、大学側双方の意図が合致することになったのでしょう、それで今回必修化が成り立ったわけです。それまでも必修にする話はあったのですが、いろんな意味で失敗しています。ですから、私は、成城大学に来てみて、WRDは文芸で必修でしたよね、成城大学は先を行かれているなというのがその当時思っていたことですが、私の勤務する大学でも、遅ればせながら必修になったということでしょうね。

ところで、「話す・聞く・読む・書く」と言えば、基本的な日本語リテラシーの問題ということですが、今回まず提起したいことは、こういったトピックの話をする時、だいたい、表現技法上の問題のみがクローズアップされてしまいがちである、ということについてなのです。

神奈川工科大学における学生の意識

その話をする前に、うちの学生が持っている意識について述べさせていただきます。学生の意識の傾向として、「自分ではできない」というのがあります。落ちこぼれてきたというか、自分は勉強が全然できなくてここまで来たという意味で「自分ではできない」という意識なのですが、よくよく分析してみると、次のような傾向があります。「自分に何ができて何ができないか」を、自分で判断できないということです。例えば、難しい数学の問題をぱつと与えられると、「俺、できないから」と、それで適当なことを答えるわけですね。そこで、「なんで適当に答え

るの？」と理数系の先生が聞くと、「答えないと先生怒るでしょ？」という感じで、その場しのぎに適当なことをとりあえず間違えてもいいから言う。「できないというのは、君分かっているんだよね？」と言うと、「はい」と答える。実際は、「でも、この式って分かっているよね。この式を分かっているなら、これは解けるはずなんだけど…」というように、できる部分とできない部分を分けて教えていくとできるはずの問題なのです。学生は、自分ができるとできないことの区別が分からなくて、全部一緒くたに「できない」と決めつけてしまっているのです。だからできるはずの問題でも答えに辿りつけない。それで、結果的に、自ら考える能力を放棄しているという状況が出てきてしまうわけです。

これは文章表現の方でもあって、「自分はコミュニケーションが苦手だから、人前で話ができない」と端から放棄しているわけですね。だから、表現へと向かう意識が無い状態で、いくら技術のことを言っても無駄だろうと。その前に、表現へと向かう意識を持つように、どうやって学生の意識を転換させていくかが問題だということが、この日本語系の科目をやっていくにあたって、現在参加している私たちのスタッフが意識したことだと言えると思います。

表現意識の変革について

今申し上げましたように、学生自身の意識が変わらなければ何も身に付かないわけです。ただし、学生の意識が変わればいろんな意味で見え方が変わってくるので、前向きになってくる部分も出てきます。意識が変わったら見え方が変わるとはどんなことか。例えば、さっき「スタディスキル」で取り扱う内容として「話す・聞く・読む・書く」という項目があったと思います。1年生の初回の授業で、学生に、この中で一番できそうな項目はどれかと聞くのです。そうすると、うちの学生は何を答えると思いますか。これは成城大学の学生さんにもやりましたけれど、まず、多くの学生がノートの取り方をあげます。で、逆に一番苦手な項目を聞くと、プレゼンテーション、発表をする、人前で話をする、そういったことを苦手なものとしてあげてくるのです。

かつて私が、中小企業を渡り歩いていて感じたことですが、一番難しいのがノートの取り方です。例えば、「師玉君、これから会議入るんだけど議事録とってく

れる？」と言われるのですが、会議では、課長は勝手なことを言うわ、部長は変なことを言うわ、議論が右へ行く左へ行くわけです。そして、最終的に、とんでもない結論に行きついたりします。これを全部他人に読めるようにノートにまとめて文章化するのがどれだけ難しいか、と考えたらノートの取り方が一番難しいはずですよ。

しかし、そういう意識って、学生にはまず無いのですよ。だから、「僕が勤めた会社で、2、3人やられたのが記憶にあるのだけど、お局さんみたいな人が、『新人の〇〇君、これから会議だから議事録とって！』っていうのだけど、まずとれないよね。けど、とれなかったらどうなると思う？ 僕が見た限り、その後お局さんの嫌味が始まるわけね。『最近の若いのは、ノート一つとれないのよね。』という具合に。僕は中途採用だからあんまりやらされなかったけど、新卒は結構やらされていたから、君たちのなかにもそんな経験をする人が結構出てくるんじゃないかな」といった話をするのです。「こんな話を何度か聞いたことがあります。」という話をするだけでも、学生の意識が変わっていきます。実は、ノートというのは、大人でもとれないかもしれない。社会人であっても、ノートをそんなに上手にとれるわけではないことも分かってくるし、ノートをとることの意味合いが、それまでやっていた「黒板を写す」という意味ではなくなってくる。そういう意味での意識の変革ですよ。それを学生にどうやって気付かせるか、というのがこのスタディスキル系の授業の課題になります。

ところで、今述べたようなことに気づかせようとする、普通の授業の意味合いも変わってくるわけですよ。授業を、ノートをとる練習だと思えば全然違ってくる。私がそれに気づいたのは、はっきり言って仕事に就いてからなので、私自身はノートをとるのがとても下手くそです。「僕なんかは今からじゃ遅いから全然上手くならないけど、君たちは若いんだから今から練習すれば絶対俺よりかは上手くなるよ」とか、「僕がミニマムだから君たちが超えるのは簡単でしょ」というふうに話すと、授業中も何となくちゃんとノートをとるようになる、そういう意識が変わっていくというのがあります。とにかく、今から一から始めても間に合うという考えでいくと、若干の自信の無さを払拭することにもつながってくるということですよ。

プレゼン教育の実践報告①：教科書について

さて、プレゼンテーションについて話の方に入りたいと思いますが、「プレゼンテーション技術」で実践している内容、それから WRD を担当させていただいた時に実践した内容をご紹介します。これは3年前に「WRD 勉強会」でお話したことと若干項目が重なるのですが、そこはご容赦下さい。

まずは、教科書・演習についてです。先ほどもお話したように、いくつかの教科書を読み比べてみて、自分が仕事をしている時に「あ、これ知っていればよかったな」というようなのを探していったわけですが、元になっているのはだいたいこれ（ジーン・ゼラズニー『マッキンゼー流プレゼンテーションの技術』、東洋経済新報社、2004年）かなという気がしたので、メインのストーリーラインはこれに依拠しています。（著者は）マッキンゼーに勤めていて、プレゼンテーション系の教育をやっていたジーン・ゼラズニーさんという方ですが、この本を中心にして、枝葉の部分进行他の本から取り込んだテキストを作ってみました。

ただ、この教科書は穴埋め式なのですが、それだけやっても頭に入るわけがない。というわけで、もう一つ考えたのは、その時間に必ず演習を入れるようにしました。この演習は、できるだけ実際の世界に近づけた方がいいだろうなということで、できればプロの企画書というのを読ませたいなと。それでちょうど良かったのは、数年前に出版されていた『あのヒット商品の企画書が読みたい』（戸田覚、ダイヤモンド社、2005年）という本があったので、これを使いました。この本にある例をいくつか紹介して、これをただ単純に感動して読むのではなくて、どうするかというと、ガイド的な質問に答えさせていきます。たとえば、こんな逸話があつて、こんな状況の中、こういった戦略のもとにこの商品は開発されたのだということを意識化させるような質問に答えさせる。ここは興味関心を引く内容でもあるので、モチベーションにつながる部分です。それに加えて、批評的意識を培っていくための質問がはいります。こんなプロの企画書であっても失敗しているところがあるよね、という失敗の部分意識化させて、彼ら（プロ）以上の企画プレゼンにするにはどうすればよいのか、という発想が自然に身につけられる演習の形にしたいなと思って作っておりました。今もやっています。

プレゼン教育の実践報告②：現実（先端）とのリンク（その1）

それから二つ目。先ほどの企画書を使った演習は、学生自身にとっては、まだ自分が仕事をしていないので、断然かけ離れた出来事なわけです。テキストはテキストで、理論的な話が中心です。ということは、学生は、間をつなぐ身近な事例がないと、なかなかモチベーションを維持できない。ということで、ここはくだらない雑談を多く入れるようにしています。例えば、私の個人的な与太話になりますが、神奈川工科大学に常勤が決まったのは5年前です。今47歳ですから、42歳までフリーターの状態で、子どももいながら年取200万円以下で生活していたことになります。もちろんそれでは生活できないわけで、実質的に奥さんに全面的に依存する、半分「ヒモ」状態なわけです。ということは、飲みに行くとき、例えば、今日は阿部さんと飲みに行かなくちゃいけないというとき、これは大変なことなのですね。それでどうするかというと、1週間前から晩ご飯を作り始めます。で、奥さんに料理を作っていて、ご機嫌な感じが今だ！と思った時に、「来週の火曜日は、阿部さんと行かなくちゃいけないんだけど…」と持ちだすというわけです。これは、プレゼンテーションでいうところの聞き手を分析した上で戦略的に相手にモーションをかけるという、そういった部分があるのですが、そのときに事例としてこのようなくだらない話を引き合いに出すのです。

ただ、このネタに関して言うと大学によって差がありまして、僕はそういう貧乏ネタをよく使うのですが、成城大学では通用しませんでした。例えば、学生時代の貧しい時の体験を元にしてプレゼンテーションのテクニックを体感したのだよということを話したいにも関わらず、まず貧乏な話をした時に、「さ〜っ」と教室の空気が引くのです。神奈川工大では、同じ話をしても、私と同系の所得に近い人たちがいっぱいいるので受けてくれるのですが、成城大学で最初にその話をした時は、「世の中にこんな可哀想な人もいるんだ。」という、ちょっと同情する空気が漂いまして。「いやいや、同情されたくてそんな話をしているわけじゃないんだ。」と、そのようなことがありました。ですから、ネタは大学によりけりだと思います。もちろん、それから成城大学の授業では、自分の授業ネタについては方向転換をしました。

プレゼン教育の実践報告③：現実（先端）とのリンク（その2）

三つ目。プレゼンやマーケティングの先端的な事例をできるだけ仕入れるようにするということがあります。私は企業人という意味では素人ではありますが、さすがに教えるとなったら、「素人なんだからお前らいいよね」というわけにもいかないので、ここは情報収集命で、必ず新しいのが何かというのを仕入れるようにはしていました。例えば、私は貧乏生活を送っていたせいで、OB会に出るのが大嫌いでした。一人だけ無職で、みんな名刺のある同級生に会うのも嫌だなんて思ってたんですけど、プレゼン系の科目をもつようになってからOB会に出るようにしました。OB会に出ると、例えば先輩とかがいて、その中に会社の社長とかが結構いたりするわけです。そういった人から、マーケティングの現状について話を聞くために、ここ数年は、OB会にあえて出かけるようになっています。また情報収集に関しては、ほかに理論的な動向を探ることがあります。前にお話をした時に、サイバービジョンのお話をしたかと思いますが、最近気になっているのはニューロマーケティングですね。今、電通や博報堂が命がけになって理論化しようとしている分野です。まだ10年位かかるのではないかと僕は予測しているのですが、1980年代に、電通や博報堂がCMを作るために記号論に躍起になっていた時代によく似ているな、という気がするので、こら辺の話を仕入れて学生に紹介しています。

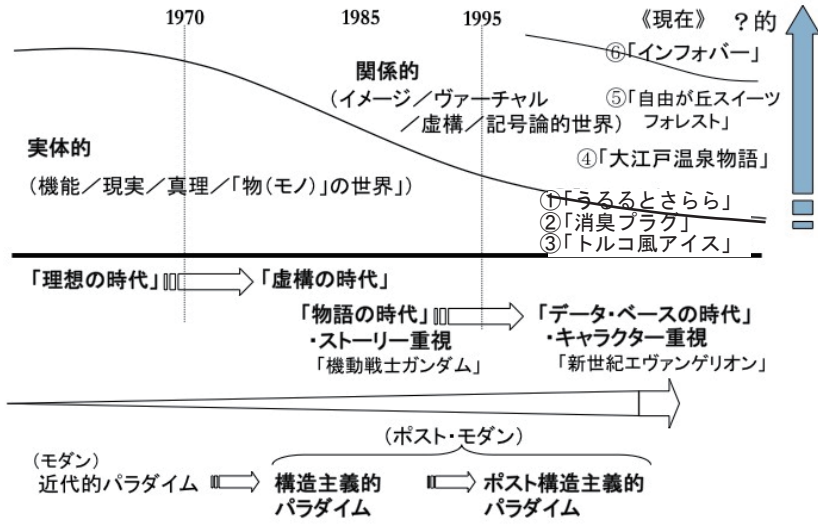
プレゼン教育の実践報告④：企画書を使った演習

四つ目。私自身の専門領域からの位置づけです。これは私が学部生の頃、塘先生と同級生の頃に、私が所属していたゼミの内容なのですけれども。現在の私は、批評理論、文学理論が専門ですが、元々は記号論でマーケティングをやっている先生のゼミにいました。この領域のアプローチを自分の関連分野として持っているんで、そこら辺を使って説明をしたりしています。

具体的に見ていきましょう。私が「プレゼンテーション技術」の演習で使う企画書というのは、主に六つです。一つ目が、家庭用エアコン「うるるとさらら」。皆さんご存知ですよね。「うるるとさらら」というのは、ダイキンが業務用エアコンの製造に特化して、家庭用エアコンから撤退しようと思っていた時に作り出

された商品です。ダイキンの企画部門の人たちがどのようなことをやったかという、調湿機能を入れたら他の家庭用エアコンと差異化できるということで、企画書の段階ではまだ調湿機能の技術開発がなされていない状態にもかかわらず、企画書が先行して通ってしまったのです。企画書が通ったということは、商品完成までのスケジュールが組まれて、何日までにどのような部品を発注するというのが組まれるから、もし既定の期日までに技術開発が間に合わなければ、全部負債になるわけですね。そのようなぎりぎりの綱渡りの状態で、「うるるとさらら」が生まれてきた。そして、それが大成功を取めたので、今やダイキンのブランドとなっているのですが、そういった企画書と同時に、それゆえダイキンは撤退することはなかったとか、そういうエピソードが入った記事がこの本に載っているわけです。そうした事例を一つ一つ紹介して、読んで、アンケートに答えて自分なりに記入してもらおうという作業を演習で行っています。

じゃ、さっきの記号論的なものを使ってどんな説明ができるかというところですが、私の授業ではこんな図表（右頁参照）を使っています。これを細かく説明していると時間が無くなってしまいますが…、よくご存知の方もいらっしゃるかもしれないです。社会学の分野で、1970年代を境に社会のパラダイム転換があったという話があります。これは大澤真幸さんという方が「理想の時代から虚構の時代へ」の転換とか、最近流行りの東浩紀さんという方が『動物化するポストモダン』（講談社現代新書、2001年）という著書で述べている「物語の時代からデータベースの時代へ」といった議論と重なります。社会的なパラダイムのチェンジを表わしているのですが、もう少し違うレベルで見ると、思想系の中で言われる、近代的パラダイムが構造主義とかポスト構造主義という思考が出てきて、パラダイムの転換があった、というような議論とだいたい重なってくるわけです。授業では、これらを見合わせていった時に、パラダイムチェンジのキーワードとして実体・機能・関係・バーチャルといった言葉をあげて、実体的なものの捉え方、機能的なものの考え方から、関係的なものの捉え方、イメージとかバーチャル的なものの考え方への推移が、パラダイムの転換を示しているとか、そういう話をひとしきりするわけですね。



図：キーワードで捉える時代の推移

そうすると、先ほどの六つの企画書は、実はきれいに分かれるのです。この中で特に着目したいのはトルコ風アイスですが、トルコ風アイスって食べられた方いらっしゃいますか。あのトルコ風アイスというのは、実は企画書の段階では一度失敗しているのです。お蔵入りになっています。お蔵入りになっていたのに、社長が、「この時期、何か新しいのを出さなくちゃいけないから、眠っているやつで何かいいのはいないか。」と言った時に、たまたま目の目を見たのがトルコ風アイスの企画書で、それがヒット商品になった。だから、企画書をよく見ると、よくこれでゴーサインが出たなというか、「これ、企画段階で一度失敗したのは当たり前だね。」という企画書になっているのです。それで、トルコ風アイスの企画書を学生たちに読ませて、「どこがいけないと思う？」というように見させていった時に、「商品の売りに見合った新しい価値評価軸が打ち出せてなくて、それまでの古い枠組みの評価軸の中に留まっているよね。」という話もできるのです。

その後で、大江戸温泉物語や自由が丘スイーツフォレスト、とりわけ後者は企画書界のカリスマと呼ばれている人が書いたものですが、この人たちではどうなっていくかということ、ここら辺 (イメージ・ヴァーチャル的なものの捉え方)

のパラダイムを取り入れた企画書になっているのです。今日、奇しくも山口昌男さんが亡くなりましたよね。山口昌男さんというと、「日常と非日常」、「中心と周縁」、こちらの記号論的な分割というのを民俗学に持ち込んだ人なのですが、記号論的な分割を民俗学に持ち込んだところで、実は広告代理店などのマーケティングの理論的なバックボーン、はっきり言えば電通と博報堂の理論的なバックボーンにつながっているといえます。言い換えると電通と博報堂によるマーケティングの記号論的理解は、山口昌男を媒介にして入ってきたようなところがあるわけです。消費社会の考え方自体が、わりと記号論的な性格を帯びていることと合わせて企画書を見てみたら、この分割方法が企画書にばっちり出てきます。縦軸と横軸が「日常と非日常」、あるいは「ケとハレ」とか、そういったタームが企画書にどんどん出てくる。「これ、実体が無いのに企画書が成り立っちゃうんだよね。」とか話をしながら、企画書の在り方を位置づけていく。それで最後は、「じゃ、今、新しいパラダイムってあるのかね？」という話をして、これからについて考えてごらんとか言いながら、「ここ、誰も編み出していないから、君たち編み出してみたら？君たちが編み出したら大もうけだよ。」と、そんなくだらない話をしながらですが、一連の企画書全体を見渡す一つのツールとして記号論的な方法を使ったりします。

それから「せっかくなので記号論のお勉強もしましょうか。」ということで記号論を教えたりもしています。記号論的なマーケティングの方法は、1990年代で終わったのではないかという話もありますが、1980年代に高度消費社会になった時に、CMを一番作っていた電通、博報堂さんたちが頑張って勉強していたのが、この記号論のマーケティング方法です。たとえば博報堂の主任研究員だった青木貞茂さんであるとか、電通総研研究部部長チーフプロデューサーの岡本慶一さん、電通コーポレート・コミュニケーションの副理事だった福田敏彦さんであるとか、この方たちが記号学会では活躍していた。特に青木貞茂さんは記憶に残っているのですけどね。たしか記号学会で発表していたのが、明石家さんまが出ていた「ポン酢しょうゆ」のCM分析だったと思います。広告代理店の人は、ある意味文学系の記号論者よりも一生懸命研究していた。これが集大成されるのが1990年代に入ってからで、方法論化されて、CMを生み出すパラダイム的な

基盤として定着してきます。授業ではここからCM分析などを見せたりする時もあるのですが、「とにかく今君たちが触れているCMであるとか、そういったものが、こういった軸で見えてくるよ。」と。「その軸が見えた上で、自分たちで何か企画を考えてみると、これを知っているのと知らないのでは、企画の形も断然変わってくるよね。」という感じで、プレゼンを考える一つの材料にしてみよう、というようなことをやっていました。

プレゼン教育の実践報告⑤：象徴価値としてのコンテスト

さて、話を戻しましょう。他にプレゼンテーションの授業をやっていて工夫した部分は何かという、始めに阿部先生のご紹介にもあったし、本日呼ばれるきっかけにもなったのであろうプレゼンテーション・コンテストがあります。今、私の大学では、インターカレッジのプレゼンテーション・コンテストですね、大学対抗のプレゼンコンテスト、こちらは昔からやっていたので続けているのですが、最近では、神奈川産学チャレンジプログラムというのに毎年3チームくらい出しています。これは神奈川経済同友会というのがあって、神奈川の企業と大学が提携して、企業が現在抱えているお題を出して、そこにアプライした大学の学生たちがそれに対して企画書を作成してプレゼンをやって競うというものです。

別に学校を有名にするつもりは全然なくて、これに入賞するといろいろな効果があるのです。うちの学生は特に自信が無いのですが、出てみるとわりといい大学に勝って、プレゼンでは優勝することができたとか、そういったことが学生本人たちにも自信になりますし、「え、あいつらのプレゼンで入賞するわけ!？」と、出場していない周りの連中も結構強気になったりするのです。まあ強気になるかどうかは別にしても、前向きに取り組んでやってみようという空気が周りへ広がる効果があります。で、活気づいた雰囲気が拡張すると、プレゼンをする友達を見て、そのプレゼンにどんどん批判的なダメだし発言をするようになる。その発言をしているのが、この間まで引きこもり系のオタクちゃんたちだったりして、そんな彼ら彼女らがどんどん喋っていく。そういう雰囲気を何となく活性化してくれる一つの手段として、私は使っています。

ちなみにインターカレッジは、最初は2校でやっていました。私の大学院の時

の恩師というか、お世話になった中山智香子先生（東京外国語大学総合国際学研究院教授）のゼミとやり始めたのです。最初は大会にするつもりはなくて、胸を借りるつもりだったのですが、だんだん参加するチームが増えて今はこんな状態ですね。第3回は成城大学の会場をお借りしまして…、その節はありがとうございました。最近成城大学のチームも常連になっています。

本当を言うと、このコンテストは僕がやろうと思ったわけではないのです。学生がやりたいって言ったのですね。僕は、自分から何かをやろうというタイプではないので、学生がやりたいと言ったから「じゃ、しょうがないな。」と。昔、東京外大の中山先生のゼミが、そういうプレゼン大会に出ていたの、うちも出たいとちょっと話をもちかけてみたのですね。そうしたら、「もう出なくなっちゃった。」と言うのです。それで2校でこじんまりやりませんかとお願ひしました。というのも、東京外大の中山ゼミというのは、プレゼンに力を入れていた某大学の有名なゼミにも連戦連勝のチームだったのです。それだけ強いチームならうちが負けても恥ずかしくないし勉強にもなるということで、中山先生に無理をお願いしてやってもらったのですよね。で、学生たちですが、最初は、ボコボコにやられるだろうなって思っていたのですが、いざやり始めてみると意外と戦えるなって感じで、2年目からコンテスト形式にしました。3年くらいして優勝できるチームを作れたらいいなと思っていたら、その2回目で優勝することができたのです。それ以降、入賞することが重なってきますと、自分たちが出ていなくてもその周りや後輩たちが元気になってきます。「あいつらで優勝できるんだったら、俺たちももっとできると思うよ。」という雰囲気が出てきて、それで何だかんだ続いているような状態です。

テーマは、なるべく面白いテーマをとということでこんなテーマを使っています。「マンガに見る〇〇問題」とか、「恋愛」とか。最近は時事ネタが入ってきたりします。成城大学さんのWRDと連動させた時期もあります。WRDのプレゼンテーション・コンテストで優勝したチームを、インカレのプレゼンテーション・コンテストに送る。当然、成城チームが優勝していますけどね。そういった時期もありました。今は時期が重なってしまうので、連動させることが難しくなってしまうのですけど。

プレゼンテーション・コンテストの効果①：教育上の効果

さて、プレゼンテーション・コンテストには、とにかく象徴価値としての効果があります。自信のなさを払拭してくれ、科目全体を活性化してくれます。ですが、プレゼンテーション・コンテストについては、もう一つ教員への効果というのがあって、それが私にとっては非常に大きいです。特に神奈川工科大の場合、非常勤講師で固めて動いていますので、非常勤講師間の意思の疎通を担保することは、死活問題なのですが、そのツールとしての役割があります。

まず、プレゼンテーション・コンテストをすると、授業の情報交換なども含めて、良好なインフォーマル・システムが作れます。また、次の大会はこういう大会にしようよという共通の目標ができるので、お互いに教育理念的なところでのステップアップもできます。今年度は、皆さん仕事が忙しくて疲れ切っていたのでできなかったのですが、昨年冒険的にやってみたのは、「大学生に読みたくなる本」を企画させ、そのプレゼンを現場のプロから見てもらうというものでした。『出版甲子園』というのがあるのはご存知ですか。どこかの大学生が企画して、各大手のビジネス出版社の人たちが出資して、コンテストに入賞したらその本を出版させる、というものです。実際、東京ではそれが出版されていると思いますが、そのパターンで今度はやってみようよということで、この時には実際にクリエイターの人を呼ぼうと。それでダイヤモンド社の編集の方を一人呼んで、もう一人はNHKのクローズアップ現代のプロデューサーの方を呼んで、それで審査員をやらせよう、そんな形でコンテストをやりました。これも教員間でそういう話をしている時に、「じゃ、本当にプロの目からみてどうかやってみようよ。」ということでそうなったのですが、そんな教員間のコミュニケーションから生まれてくる、教育上のステップアップ、理念的なステップアップが可能になることがあると思います。加えて、教員の教育力向上でしょうか。これは、お互いに競い合うので必然的にアップします。

学内のコンテストについてはそれまで考えていなかったのですが、成城さんのWRDプレゼンテーション・コンテストを見習って、「じゃ、うちも！」と。必修化されてクラスも増えたことだしやってみようよということで、神奈川工科大クラス対抗戦というのを昨年あたりから始めました。内輪のコンテストなので商品

も全然出さないんですけど。

プレゼンテーション・コンテストの効果②：教員間のつながりによる雰囲気づくり

プレゼンテーション技術についての四つ目ですね、「教員間のつながりによる雰囲気作り」。これは先ほどのインターカレッジとは別に気を付けています。できるだけ気分良く先生方に授業をしてもらう、ということです。教員があまり乗り気じゃない授業って、多分学生も乗り気にならないはずですよ。だから、どうやって乗り気にさせるかといった時に、どうしたら教員が居心地のいい感じで授業をしてくれるかな、ちょっと楽しげな感じの雰囲気にもっていけたらなというのは、とりまとめをするにあたって気を付けていることです。それで、できるだけくだらないことを言って場を和ますというようなことを柄にもなくやっています…、っていうのは表現がよすぎますね。実は自分の知っている教員を授業で売りまくる、というのがその手段として具体的にやっていることです。

ここにいらっしやらないのですけれども、例えば、こちらの非常勤のK先生は、WRDを持たれていますよね。K先生はうちの大学でも教えていらっしやるのですが、そのK先生がどういう経緯で奥さんをゲットしたかというのを、非常に下世話なネタかもしれないのですけれど…、学生に言ったりします。まずはちょっと中途半端にネタフリをして、「ほら、皆気になるだろ？ところでその前にちょっと別な話しするね。」と言って、「お前合コン出たことある？俺もあんまり無いんだけど、合コンで成功するなんて誰も信用できないよね？でもさ、成功した事例があるんだよ。」とか言ってK先生の話に戻るとか、そういう意地悪なフリをしたりもします。

それからもう一つ、これは重要なことで、その際に必ず気を付けているのですが、ただ単純に下世話な話をするのではなくて、各先生がプロの先生として、私自身がとてもリスペクトしていることを、学生に伝えるということです。各先生のことは、学生の間で情報として雰囲氣的に伝わっていくのです。先生方のいいところが伝わった時に、各先生方にとってもわりと居心地のいい空間というのができるじゃないかと。これは私が信じている部分なので、あまり根拠の無いものではありません。ただ、このことには何より気を遣っていて、居心地のいい雰

雰囲気作りには一番効果があると思っているところなので、こちら辺の雰囲気作りというのは今話したような実践になると思います。結果的には、学生が質疑応答しやすい雰囲気とか、あるいは活気あるディスカッションの雰囲気につながっていくということで、私自身は重視しているところです。

教育上の自己認識について①：《転移》するものへの配慮

以上が、プレゼンテーション技術の実際の具体的な授業内容として、気を付けたり実践している部分ですが、次の教育上の自己認識は、授業をするにあたって個人的に私自身が気をつけていることです。一つ目は、《転移》するものへの配慮です。《転移》とは精神分析の用語で、本来は、患者さんが無意識の中で欲望の対象となっているものの代理として、別のものに欲望の対象を向けてしまうことですが、ポストモダンの思想家としても名前を知られているジャック・ラカンによれば、もう少し違った解釈もできるようです。そのジャック・ラカンの日本の紹介者に新宮一成さんという精神病理のお医者さんがいるのですが、新宮さんは、ラカンをよりどころにして、《転移》を、臨床の現場で治療者と患者の間で起こる「欲望の交換」みたいなものとして捉えています。『ラカンの精神分析』という本が講談社から出ていまして（講談社現代新書、1995年）、その本の最初には有名な話が出てきます。新宮さんがとある学会に出席していてそこでレセプションがあったと。レセプションで何をするかというと、だいたい「お偉いさん」と名刺交換をして話したりするのですが、話しているとお腹が空いてきて、ふと見ると隣にまぐろのお寿司があったそうです。食べたいなと思ったけど、挨拶が終わって見たらもう全部無くなっていた。その翌日のこと、新宮さんが、担当している患者さんと会って「昨日はどんな夢を見ましたか？」と尋ねたら、「まぐろのお寿司をいっぱい食べる夢を見ました。」ということがあった、という話です。ちょっと不思議な話ですが、新宮さんに言わせればそんなことはざらに起こるのだと。新宮さんは、これを「欲望の交換」と位置付けています。それで私が言いたいのは、これって、ちょっと視点を変えてみると、このようなことが授業の現場でも起こっていませんかということです。私自身、わりとよくそのような感覚に陥ることがあります。もちろん、学生といい関係を築けていない時は、そんな

ことは起こりようもないのですが、学生との関係が良好な時には、彼らの欲望を自分の中にもらって、僕の欲望が彼らの中に移っていく、と感じるときがあります。

逆に考えれば、これは怖いことだとも思います。例えば、私が教えている内容を、「こんなものくだらない」と思っていることも結構あるのですが、その思いを引きずったまま授業をやると、その感情が学生にそのまま伝わるといことなのですね。それで、なるべく自分の精神のコントロールを心がけているのですが、実際これは難しいですね。ただ、自分の中でそういうことが起こり得るといのが、教壇に立つときの一つ重要なカギとなっています。

教育上の自己認識について②：プロフェッショナルとしての姿勢

そして、私自身が気をつけていることの二点目です。私は、他の人よりもわけの分からない体験が多いので、実際の場面と関連づける時に、自分の体験談を話すようにしています。ちょっとまた話をずらしてよろしいでしょうか。私、職を転々していた時、某専門学校に勤めていたことがあります。そこは専門学校ですけど、入学してくるのはうちの学生どころの話ではない。すごい悪そうな学生を入学式で見かけることもままあって、あいつ、うちのクラスに来なければいいなんて思って同僚の先生たちと話したりするわけです。そうすると、だいたい自分のクラスに入ってくるのですけどね。チーマー上がりとか、暴走族上がりとか、入ってくるのですよ。それで彼らが入ってきた時、彼らとどう付き合っていくかが課題になるわけですけど、その当時、その専門学校は「軍隊」と言われていたのですね。要するに、礼儀も何もなっちゃいない連中を殴ってでもいいから軍隊的に統率をとらせる、という対処法です。これが当たり前の状態でした（現在は、違うみたいですが…）。

専門学校というのは、はっきり言って企業の論理で物事を評価します。だから企業のチェックシステムで、授業の中で学生（の態度）を規制できない、あるいは統率できない教諭は、ダメという評価をされるわけですね。（そうした制度によって）散々いじめられるわけです。そういったことに対する疑問もあったので、私はどうしていたかという、別の方法とりました。普遍化できる話ではないけ

れども、できるだけ自分の話をする。これは一番信頼する上司から言われたことですが、「そいつらと本当に上手くやりたいのだったら自分を語れ。」と言われました。自分を語るってどういうことか未だによくは分からないのですが、まあ、経験談を話すしかないということで、ずっと話していたのですけれど、経験談などを話しているうちに、「こいつの生き方はこうなのか。」と学生に受け入れられる場合もあるし、もちろん拒絶される場合もあることがわかってきます。いずれにせよ、そこからやっていかないと何も始まらないし伝わらないという思いと、その時の経験もあって、自分の経験を話すのは嫌だし、ろくな経験ではないのですけど、今でもなるべく意図的に話すようにしています。

そしてここで忘れないようにしているのは、研究者としてのプロ意識です。専門学校にいと、教育さえできればいいのかという話になってきます。実際、その専門学校の先生は、本当に授業が上手いです。当時、同僚の人たちを見ていて、ほとんど完璧なプレゼンテーションを見ているみたいでしたが、私のほうは全然そういう感じではなかったのです。ただ、自分ができなかったから言うわけではないですが、そうした環境や教育の在り方を眺めていて、何か欠けているものがあるなと感じていました。そして今、大学で教えていて、どちらかという専門学校的な教育スキルを身につけなくちゃいけないような雰囲気になった時、一番怖いと思うのは、専門学校に勤めていたときの記憶ですね。多分、大学というのは、教育ができればいいということじゃなくて、研究者としてのプロ意識を持った人間が教えるから、授業が下手くそでも意味があるのではないのかと。このような考えが僕の中にあるわけですね。

というわけで、研究者としてのプロ意識というのを、自分なりにかなり意図的に持つようにしています。それで、研究者としてのレーゾンドートルは何かっていうと、私の場合、自分が文学者であり、楽器は弾いてないけれども未だにミュージシャンであるところにあると思っています。だれも言うてはくれないので自己規定ですけど…、表現者としての自覚にあるのではないかと考えています。ですので、ミュージシャンであり文学者であり、表現者としての自分の意識というのをなるべくいい水準で持っていないといけなないと。それは先ほどの《転移》の話とも重なるのですが、せつかく自分から表現をするような、表現意欲をかき立て

るような、そういう表現教育の可能性を問うのに、自分が萎えていたのではダメじゃないかと、そういう意識で臨んでいます。

自分自身が気を付けていることの最後は、そうした意識を伝える言葉についてです。先ほど、成城大学では貧乏ネタは通じないというお話をしました。他にも、雑談については、うちの大学だとオタクネタやそれに纏わる言葉がかなりメインになってしまうこととかがあるのですが、それは学生の意識を変革しようとする時の重要なツールでもあります。とはいえ、そういった意識を変えるために使う言葉というのは、その都度変わってくるので正解が無いのですね。同じうちの学生でも、今年の学生に使ったネタが次の年は通じないこともあるし、昨年使ったネタが今年に通じないこともしばしばありますので、これはずっと模索し続けるしかないなと思っています。でも、肝心なのは、「私自身の《表現主体》としての意識が学生に《転移》すると考えるべき」ということですね。教授法云々以前に、表現主体としての（私の）意識が必ず伝わってしまうので、そこを忘れないようにするというところが、私自身肝に銘じているところです。

表現教育の可能性に向けて①：ヴィーゴの「クリティカ」と「トピカ」

以上、私が実践してきたお話ですが、最後に提題というわけではないですが、私が問題意識として持っていることを、二つほどお話をさせていただこうかなと思っています。

一つは何かというと、最初にお話しましたように、表現する技術は教えることができても、結局、表現する主体がその意思を持たなければ意味が無い。では、表現に向かう主体性ってどのように育成していけばいいのかというのが、私が一番気になっているし、悩んでいるし、探していることです。ここに引用させていただいたのは、私の大学院の指導教官の文章です（これを持ってくるのもどうかと思うのですけれどね）。私は大学院時代、ヴィーゴの研究者の上村忠男さんに師事していたのですが、その上村さんが研究しているヴィーゴというのは、イタリアの思想家で、雄弁術、修辞学の教員だったのです。いまならプレゼンテーション技術の教員となりましょうか。そして法学部（専門学科）の教員になりたかったらしいのですが、いわば教養教育の教員で身分的には終わってしまった。思わ

ず自分の身の上を重ねたくなるのですが…。

そのヴィーコは、レトリック教育というのに関してこんなことを言っています。「青年達にはまずトピカを教育して、あらゆる論弁にとっての必要不可欠な共通のトポス、すなわち、論拠の在り場所を十分なだけ豊富に覚え込ませ、賢慮もしくは見識を発揮し雄弁であることが可能となるような共通感覚を磨かせ、そのあとで、つぎにはいよいよクリティカを学ばせて、正しい判断を自分で下すことができるように育成してゆくべきである。」(上村忠男『ヴィーコの懷疑』、みすず書房、1988年、161頁)。クリティカというのは、私が授業で狙っているところの、例えば、先ほどの「文章表現技術」の中にあつた構成的な能力であつたり、あるいは論理的な論証能力であつたり、そういった部分ですが、その前に発想術といましようか、それらのきっかけになるような部分での訓練を、彼は「トピカ」と呼んでいます、そういったものが必要であると。

じゃ、現在それに位置するような教育ってあるのだろうか。これに関しては、多分、東谷先生のご本(『大学での学び方』、勁草書房、2007年)にもありましたね、「問いを設定する」という手法が。あそこに関わってくる問題だと思うのですが、私自身、そうした問いを設定するための教育ってどうしたらいいのだろうと、自分なりに模索している最中です。ヴィーコのトピカにつながるようなものの手がかりはないかなといろいろ探しているのですけれど、なかなかないですね…。それでも何かヒントになるじゃないかと、ようやく見つけた1人がこれです。グレゴリー・ベイトソンです。ベイトソンという名前をご存知でしょうか。「ダブルバインド」という言葉は聞いたことがあるかと思うのですが、その概念の提唱者です。ベイトソンは精神分裂病についても研究していたのですが、彼によれば、その精神分裂病の患者さんというのは、実は子どもの頃にお母さんから「あなたは私を愛しなさい」という命令と、「私に近寄るんじゃない」という、前者と矛盾した命令を下された状況に置かれ、アンビバレンツな主体形成を行っているというのです。それが繰り返されていくと精神分裂病になりやすくなる。そんな主体形成の状況をダブルバインドというキーワードとして提示したのが、ベイトソンという方です。ところで、このベイトソンというのは、民俗学にも手を出すわ、いろんなところに手を出すわで、厄介な人なのですが、日本では浅田彰が紹介し

てちょっと有名になりましたね。この方、教育についてもいろいろなことを書いていまして、『精神と自然』という本でこんなことを言っています。「アメリカでもイギリスでも、おそらく西欧文化圏のどこでも同じだろうが、学校教育は真に重要な問題を扱おうとはしない。」と。(佐藤良明訳、新思索社、2006年(改訂版)、3頁) アメリカとイギリスの教育を批判しているのですが、学校教育ってこれ、大学の教育のことです。「根本的な問題は注意深く避けて通る。そのことを痛感した私は、もう一冊別の本を書かねばなるまいと決心した。進化に限らず、朝食の摂取に始まる日常の生活、つまり生物的・社会的事象に関して、対象に密着した論を展開するには、どんな考えを基本に据えなくてはならないか、そのことをまず明らかにしておくことの必要性を改めて認識したのである。」(同3頁)と。そこで思考の端緒となる部分の訓練が必要ということになるのですが、それではペイトソンが必要と考える端緒は何かって言うと、いわばトピカの発想なのですね。異質な系列の事象の間に二つの事象があるとすると、そこにあるパターンを見出して、さらにその二つの関係、また別の関係があって並べてみると新しい共通パターンが見出せるとか、メタレベルのパターンを見出していくとか、そういう繰り返しの思考を、訓練というか思考作業みたいな形で組み込んでいく必要があるのではないかという話が、『精神と自然』の中に出てきます。端緒を見出すための、そういう訓練をするのをどうやって授業に組み込めるかなというのはいここしばらく考えていたことなので、ちょっと参考までに挙げてみました。

他に似たようなところで何があるかなと思って、最近見つけたのでは、河本英夫さんの『オートポイエーシスの練習問題』(日経BP社、2007年)というものがあります。これはどんなのかというと、要するに、教えられて学ぶ、「知識」によって知るといふのは違う位相で、「行為」を学ぶとはどういうことかを、オートポイエーシスというシステム論から考えるアプローチです。端的な例でいうと逆上がりですね。どんなに機能的に知識的に逆上がりを教えても、結局、身体イメージのような感覚をつかむかどうかで、逆上がりができるかどうかは分かってくる。機能的な面ではすぐにできてもおかしくないほど訓練されていても、実際に逆上がりという行為ができるようになるためには、普通に言われている知識的なアプローチではない行為を学ぶ過程が必要だと。そこで、行為の生成過程みた

いなものをどうやって教育の過程に取り込むか、というのが課題となり追究されているのが本書です。

いくつかの訓練パターンがあるのですが、これは、まだ学生にはやってもらったことはないのですが、例えばどんなものかという、(ペットボトルを提示して)これを見るとだいたいの方は「ペットボトル」と言いますよね。これを別のものとか、正反対の呼び方をする。例えば、これを「やかん」と呼ぶことにしたとすると、「なぜ、あなたは「やかん」とつけたのか、勝手にその理由を考えて下さい。」と。やかんがこのペットボトルになる理由もないし、二つの間につながりは全然無いのですが、そこに何かが見出せるかという思考訓練をするということがあげられていました。河本さん自身、試行錯誤している中での試案的なアイデアにすぎないとも言えるのですが、そういったのも訓練の一つの方法としてはありなのかなと、可能性として考えているところです。

表現教育の可能性に向けて②：アクティブ・ラーニングと学修時間の確保

最後になります。あと2、3分よろしいでしょうか。

表現教育の可能性、あるいは能動的に自分から表現したくなる、プレゼンしたくなるような主体性をどうやって作っていくかといった時に、平成24年8月に発表されました中央教育審議会答申の「新たな未来を築くための大学教育の質的な転換に向けて」、こちらに良いことが書いてあるわけですね。「…生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生から視て受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。」(9頁)とあります。まさにアクティブな主体を作り出すことには、私も大賛成です。

ところが、これが実際の政策段階になると、学修時間確保の話にすり替わるのです。ここで文科省批判をするのもどうかと思うのですけれど、「学修時間のための時間を増やされても、俺が学生だったら、勉強なんか絶対しないよなあ。」と思うのですがね。まあ、それは置いておいて、文科省の答申では四つの方策が

挙げられています。「教育課程の体系化」、「組織的な教育の実施」、「シラバスの充実」、「全学的な教学マネジメントの確立」です。「教学マネジメントの確立」では、学長からのトップダウン形式のような組織体系や、企業的な人事システムみたいなものをわりと推奨する雰囲気があります。これですけれど、私から見て一番疑問なのは、かなりテイラー主義的だということです。テイラー主義って、別の言葉で「フォーディズム」などと同一視されて言われたりしますね。工場で同一規格の品質を大量生産する時に、人事だけでなく、作業過程や工程も含めて、科学的にシステム化していく、っていう方向性です。答申も、システム化する方向性が打ち出されていて、私から見ると、まるで工業製品の生産ラインのように管理的なフォーマルな形式に重点を置いて今後の大学教育を形作っていくようなポイントが全て揃っているわけですね。これにはちょっと違和感を覚えます。違和感を覚えるといっても、私自身、先ほどカリキュラムの体系を作ったのはまさにこの体系化じゃないか、とも言えます。シラバスも、答申に沿って、充実させるためにいろいろ内容を考えていますし、教学マネジメントではないですけど、非常勤のマネジメントがなるべく上手くいくように模索しています。それに、実際私どもの大学は、この答申内容を受けて動いています。

ただ、今、これが大学教育の中でやられている時に、どうもガチガチの企業的なフォーマリズムに近くなっているじゃないかと感じるのです。行政学で言えば科学的管理法ですね。そこにどうしても疑問を感じてしまう。では、なぜそう感じるのかというと、ここで今回の話に戻るのですが、能動的に考える主体を育成することが目的の教育システムに、フォーマル・システムは本当に有効なのかと思うからなのです。アクティブ・ラーニング、あるいは、表現主体を育成していくという観点に立った時に、ガチガチの雰囲気になってしまうと、そういった創造の芽が摘まれてしまうのではないかと。これは、私自身、「軍隊」と言われていた専門学校にいた時の経験から感じていることでもあるのです。大学教育が企業化していくというのは、大学教育学会などに行くとすごく感じるのですが、どうも専門学校の時の方向性に似てきている。だとすると、そうした企業的なフォーマル・システムの中にはまり込んでしまうと、逆に能動的な主体形成という目的から逸れてしまうのではないかと、これが私の提題の二つ目です。

カツェンバックという方が、フォーマル・システムに対してインフォーマル・システムを重視したシステム、あるいはそれを組み込んだシステムというのが必要になるよ、という本を出しています。それには、フォーマル・システムは、ガチガチにやってしまうとインフォーマルを阻害する面が出てくる、というような内容が書かれています。現在の大学教育もその意味でちょっと嫌な空気が漂っているなというのが、私自身の率直な感想です。そこで、インフォーマル・システムを改めて重視した大学の在り方や教育の在り方を確保しておかないといけないかなと、感じています。ですので、インフォーマル・システムを重視したいというところからでしょうか、できるだけ非常勤講師の間でくだらない雑談をするというのも、そんな現在の潮流へのささやかな抵抗の表れでもあるのですけどね。ともあれ、そういった雰囲気自体を作ることが、表現主体を育てることにつながるのではないかと、つながったらいいなと思っている今日この頃でございます。

ちょっと中途半端な提題になってしまって、時間をオーバーしてしまいました。ここで終わりにしたいと思います。これ、学生たちにも言うのですが、「僕は、プレゼンテーション教員の中では、日本で下から数えて上位に入るくらい話すが下手くそなプレゼンテーションの教員だよ。」と。ただ、ちょっと自信を持っているのは、「多分学生の伸び率でいったら、俺、上から100番に入るかな。ともあれ君たちが伸びてくれればいいんだよ。」と勝手に思っているのですけどね。とって自己逃避しているわけではないのですが…、非常に雑多な話になってしまって申し訳ありません。ご静聴ありがとうございました。

【阿部】 師玉先生、ありがとうございました。いろいろな問題提起をしていただいたような感じで、非常に興味深くお話を伺いました。

この後、私からも今の師玉先生の話の踏まえて問題提起をしながら、お集まりの先生方と議論したいのですが、この会はある種インフォーマルな会だと思いますので、このままフォーマルにきっちりやりますと、先生方もお疲れになると思います。そこで、ここで休憩を入れたいと思います。

質疑応答

【阿部】 休憩時間が少し長くなってしまいました。インフォーマルな会としてやっていきたいので、多少の休憩時間の延長はお許しいただければと思います。

さて、師玉先生のお話を伺って、私もいろいろ刺激を受けることができました。まずは、私から師玉先生に聞き手代表として質問などの口火を切りたいと思います。その後、ご参加いただいている先生方に、ご質問というか、質問じゃなくても、お話を聞いてのご自身の意見などがあれば是非ご披露いただいて、全体での討論をしたいと思います。

師玉先生のお話は、本当に興味深いことが多くて、とにかく率直に「面白い！」と思いました。

お話の趣旨から外れる話というか、実は始まる前に師玉先生と記号論の話をしていたのですが、記号論との関連で、消費社会、記号論的な消費社会になってしまったというのが、1980年代以上に、実は1990年代以降じゃないかと私は考えておまして…それはまた別の専門の話なので、ここでは触れませんが。師玉先生の実践に関するお話を伺っていて、私もなるほどと思ったことがあります。手元の資料で言うと3ページあたりですが、企画書を分析させるというお話がございましたよね。実は私、この本を持っていて、ただ持っているだけなのですが、こういう使い方ができるのだということを全然思い付かなくて、「しまった」と思った次第です。

それで、本学ではWRDということで、やはりどこか「大学での学び」、「アカデミックなスキル」を身につけることをやっているとは思っているのですが、私が成城大学に来てからは、企業に就職したら使えますよとか、こういう言い方をすると語弊があるかもしれませんが、私としては、WRDの授業の材料として、例えば企画書を作ろうというテーマをなるべく避けてきたところがあります。ただ、師玉先生の場合は、使い方が非常に面白いということで、このようにすれば多分WRDの教育目標にも合致してくるところがあるのかなと、お話を伺って思った次第です。

確かに学生は社会に出ていくわけで、実際に社会に出たら使える知恵やテク

ニックを身に付けましょう、みたいな話は、さっきの大学教育で身につける技術と絡んでいるとは思っています。それと、大学という場での学びに必要な技法というか、別に格好つけて言うことではないですが、アカデミックなスキルというか、アカデミズム的なものとの折り合いみたいなものをどうするかと。もちろん、学生の置かれている環境や学生が教育に求めているニーズ、そして学生の「能力」、「能力」っていうと変ですけど、あと、学生の持っている味というか、そういうところにも依ると思うのですが、企業に入って役に立つスキルを身につけると、いわゆるアカデミックな思考や考え方との折り合いというかスタンスについてどのようにお考えなのかと、始めから大きな話をして申し訳ないのですが、私は、今日の話の中ではそこが気になったところです。いかがでしょうか。

【師玉】 まず、私が、最初にプレゼンテーションに関する授業を持ち始めた時、自分の中で、かなり矛盾がありました。その矛盾は何かというと、処世術的な部分を中心に教えていくことに対して、自分の中でそれをどう位置付ければいいのかと。これ、もっとぶっちゃけた話をした方がいいと思うのですが、私自身の文学上の立場はポストモダンというか、そこら辺の理論が専門になります。ドゥルーズであるとかデリダであるとか、彼らの思想、理論には、いわゆる制度というのをどうやって壊していくのかが、主要な問題意識としてあります。文章表現に当てはめて言うと、文章表現の制度を壊すための理論をどうやって作るか。これが私自身の専門です。

でも学生に教えているのは、制度に順応するというか、制度の適応の仕方を教えていくということで、自分の中に矛盾は非常にあります。長年やってくると、それがすっきり分かれなくなってくるというのがありまして、これにはいくつか理由があるのですが、例えば、文学系でポストモダン系の理論を研究していると、どのような仲間ができるかということ…、私の研究仲間は左翼系の人が多いですね。左翼系の人たちに言わせると、「プレゼンを教える？ 何て資本主義に迎合しているんだ。」と、こういうことになるわけですね。実際、私の友人、仲間内には、プレゼンテーションを教えていて、そういつて皮肉られた人もいます。

ところで、僕の場合はそういう経験はないのですが、自分がその状況に置かれ

た時どういうスタンスをとるかというのは、いま述べた矛盾へのスタンスと重なってくるように思います。それでそのスタンスというのは、僕自身、ずいぶん長い間ルンペンプロレタリアートだったところにあるような気がします。要するに、最下層のさらに下層民というか、ルンペンプロレタリアートからすると、処世術に関してとやかく言うのは左翼のお坊ちゃんの見解だという、こういう立場を取れるのですね。それからすると、自分の目の前にいる学生が生きていく時に、その処世術を教えることに関して、何の躊躇も感じなくていいのではないかと。ただ、僕自身は、それを壊すための理論を研究しているよということも、学生たちには言います。その一つの土台として記号論というのがあって、でも、この記号論というのはこういうふうに使われていて、それを悪用するかのよう、電通や博報堂がこういうふうに行っているよ。これは人を騙すための論理かもしれないけど、騙す側の論理も知っておいた方がいいよね、という言い方を授業でしながら折り合いをつけているような状態ですかね。あまりきれいな答えにはなっていませんが。

【阿部】 今のお話は、なるほどと思うところがありますね。これも教える教員の考え方によるのですが、研究者としてのプロ意識みたいなのと、社会に出てからの処世術を教えることの両立性、多分、研究者の人たちが考えると「それって、両立するの？」みたいなことや、よくいう話ですが、例えば、ある大学に行くと、「プレゼン技術も含めた処世術的なスタディスキルみたいなものをやれと言われて参った。」とか、「こんなのを教えなきゃいけないのよね。」のようなことをよく言っている研究者がいるじゃないですか。今の左翼のお坊ちゃまじゃないですけど。そこの折り合いをどうつけるのか、教える側がそこをどう考えるのか、今話を伺っていて必要な課題だという気がします。さっきの、教育上の自己認識ですよ。師玉先生はお持ちになっている。きっと、師玉先生だからこそ、自己認識があった上でどうするかが、多分おできになるのだと思います。

【師玉】 このことは、未だに迷いながら進めているという感じですね。時には、自分の中ですっきり折り合いがついたなと思うこともあるし、そのことは、表向

きには気にしないのですが、自分の中の矛盾は無意識のうちにちゃんと広がっていくのです。そこはどうやって折り合いをつけるかっていう課題を、無意識に絶えず持っているのじゃないかな。絶えず持っているから、多分、出てきてしまう。特に、2年目に「プレゼンテーション技術」の授業まで履修してくれている学生たちには、わりと伝えやすくなっているということがありますね。そのような学生とは、つきあい始めてから2年経っているんで、ぶっちゃけた話を全部しちゃいます、私は。だから、「自分が教えていて、この辺で迷っていて、こういうふうに伝えているけど…」と学生に言うようになってしまいました。それが良いことだとは全然思っていないのですが、ただ、ここでいう矛盾を学生に隠して、そういった処世術だけを教えなくちゃいけない場面というのは、1年生の段階ではありますね。だからそれは、そうしないと学生が混乱してしまうので、ちゃんと区別をつけるようにはしているんですけど。それがいいことかどうかは、僕はよく分からないです。

【阿部】 それこそ、そこは《転移》をしないと、というか、そういう折り合いをつけないままでやっていると、教える側が折り合いを付けていないことが、学生に《転移》してしまうという、そういうところもあるのかなと。

この間、テレビ朝日の『朝まで生テレビ』をたまたま見ていたら、教育の問題をテーマに議論していて、『五体不満足』の乙武洋匡君が、彼も小学校で教師をちょっとしていましたけど、彼が小学校で教師をしている時に思ったのが、「教師と役者は一緒だ。」と、教師って役者だという話をしていたのです。要するに、自分が、今日はどんなに気分が悪くても、学校の外で何かイヤなことがあっても、学校の中において子どもと接している時だけは教師を演じなきゃいけない、みたいな。実際、大学の教員にそれを求められているのかどうか分かりませんが、小中学校の教師は、少なくとも免許をもっているのだから、それくらいのことはちゃんと習って実践できているでしょ、とか、生徒との接し方みたいな方法って多分持っていると思うのですが。その辺のことを考えると、役割演技をしなくちゃいけないみたいな話が、大学で学生と接する際にも必要なことだなと、今の話も納得できるなという気はしたのですが。

【師玉】 演技力は無いですけど。

【阿部】 ただ、企画書を使った授業、具体的な処世術や社会に出て役立つような話を扱うことについては疑問として提示はしましたが、今日のお話を伺っていて、アカデミックなスキルと社会に出て即時的に役立つ処世術のようなプレゼン技術は、やはりどこかでつながっているのではないかと強く感じました。師玉先生のお話の後半で、表現教育に対する提題がいくつか述べられていますが、例えば、題材は、世の中の具体的な話であっても、アカデミック的な非常に抽象度の高い話であっても、さっきの「トピカ的発想術」ですか、どこかいろんなところでそれが混ざっているのかなと。というのは、「トピカ的発想術」は、多分大学で教えることだし、それこそさっきの研究者としてじゃないですけど、「トピカ的発想術」はあって当たり前だよねと。とはいえ、私自身にはそれが備わっていないので、あんまり偉そうには言えないのですが。

ただ、ここで言う社会で役に立つ処世術という面でのスキルと、いわゆるアカデミックなスキルというのは、「トピカ的発想術」を介してつながっているのかなという気はするのです。師玉先生の中では、例えばさっきの具体的な話でいくと、企画書の具体的な処世術的なものをやりながらも、自分のコンセプトというか、研究者の立場として自分が持っているポリシーというか、その辺はダブルバインドではなくてつながっているのか、というのはどうでしょうか。

【師玉】 直接的な答えになるか分からないのですが、僕はこの世で絶対なりたくなかった職業が教員だったのです。なぜ教員になりたくないかというと、人前でしゃべるのが大嫌いなのです。なぜプレゼンテーションの教員やっているのだろう、と未だに思うのですが。嫌いなものに…、嫌いなものに行くというわけではないのですが。じゃ、なぜ今しゃべってられるか、学生の前で立ってられるかということ、1対1の教員としての仕事というか、1対1だと教員にさせられちゃう部分というのがあって、本能的にそうになってしまうのですよね。その責任感で教壇に立っているという部分もあるのですが、自分の中で折り合いが見つかることが一つだけあるとしたら、自分は研究者でありミュージシャンだから教壇に立って

いる、というところにあると思います。だから、ミュージシャンとしてダメになったら、文学者としてダメになったら、教壇には立たないぞという決意だけはあります。それは、個人的な思い入れなのでとても恥ずかしいことですし、そんな理由でいいのかということなのですが。

ただ、つなげ方自体については、本当にいろいろつながってしまいます。先ほどの記号論の分析ですけど、私が最初に教え始めたのは、情報学部の学生なのです。情報学部の学生にこの表を作って見せたのですけれど…、オタクちゃんたちなのです。皆引きこもってゲームとかアニメとかやってきて、じゃ、「職業何になりたいの?」と聞いたらゲームクリエイターになりたいとか、そういった子たちがいるのですよ。じゃ、ゲームクリエイターになる時に何が必要かという、コンテンツに対する構成員であるとかアイデアであるとか、そういった時に物語論的な知見というのは、持たないよりは持っていた方がいい。というよりも、めちゃくちゃ才能があるのじゃなかったら、技術的なものを知らないでゲームクリエイターになるにはかなりきついよと、そんなことを話すのですが、処世的にやっていることだけれど、実は彼らの心のコアにつながる部分に上手くシンクロできる一つの道具にはなったりするのです。その時に、自分なりに、制度を壊していくことによって、実は新しいブレイクを起こすようなことがあるかもしれないし、そのところで、次の段階に進むための土台の一つとして、例えば、ポスト構造主義は構造主義が分からなければ分からないし、というような納得のさせ方をする時もあります。

【阿部】 非常に説得的なお話でなるほどと思うコメントをしていただいたと思います。私自身も今の師玉先生のお話で、頭の中がだいぶ整理できたような感じがします。

私ばかり話していてもなんですし、先生方で何かご発言なさりたい方もいらっしゃるかと思います。このまま私と師玉先生ばかり話して終わってしまうのもなんですから、先生方で、今日の師玉先生のお話の内容はもちろん、細かなご質問でも構いません。何か先生方でおっしゃりたいことがあればここでご発言をいただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

【小澤】 文芸学部の小澤です。今日はありがとうございました。

僕は、師玉先生の授業を受けたくなった、そのくらい魅力的な授業だろうなと思います。また阿部先生も上手だから、師玉先生のライフストーリーを聞いてしまったような、今日はそういったような感じもします。同時に、あの質疑は、阿部先生も多分悩んでいるところなのかなと。阿部先生の、社会学者であってコンピュータを教えなければならないという、その辺の心の葛藤が出ているのかなというようにも、ちょっと感じられました。

文芸学部ではこの間まで教育充実企画委員会というのがありまして、今の学部教育をどうしようかと、そういったことについて議論がありました。その中でWRDについても議論がありました。今のWRDは内容については、基本的に各担当の先生方、常勤の先生、非常勤の先生といらっしゃるのですが、皆さんにお任せしている。そうすると、問題として出てきたのが、どうしても内容にばらつきがある、と。各教員に任されているので、かなり幅が出てきてしまっているというようなことがあります。つまり、ある先生は非常に専門の基礎的な切りこみ方をしていく、と。例えば、ある先生はご自身の専門分野の本をテキストとして、ただひたすら読んでいくという授業をやっていたらっしゃる方もいる。その対極にあるのは、そういった専門とは別にして、全く別な中立的なテーマを持ってきてそれについて議論をしていく、といった先生もいらっしゃる。かなり幅が出てきてしまって、そこに面白味もあるのですけれど、学生の方からすると、ある一定の質的な保障ができないところがあるわけですね。つまり、議論とかを、東谷先生の本ではないですけども、問題を探して議論をして文章を書くということをやった人と、そういったような授業を受けた学生の間で非常に差が出てしまう、そういったようなことがあって、その部分をどうするかというのが今後の課題になっています。

師玉先生のところは、もちろんかなり状況が違うと思うのですが、ただ授業がありますよね。それを、ある一定の質を統一していかなければいけない、そういった時にどういったような工夫をされているのかということ、是非教えていただきたいと思います。もちろん、師玉先生のお人柄でもっているところもあると思いますが、よろしくお願いします。

【師玉】そこは悩みどころですね。

理工系というところもあって、その辺の圧力はかなり厳しいです。例えば、ぶっちゃけた話でいくと、マルクス経済学も近代経済学も同一シラバスでやれ、と。これは、微積分と行列を同じシラバスでやれと言っていることと同じなのに、気が付かないのかな、この人たちは、と思いながら。理系って、わりと内容の統一がしやすいし、あとは達成度も点数化しやすいというのがあって、だから人文系もできるでしょ、とそういう発想だと思うのですね。そんな私の大学での人文系に対する無理解という状況があるので、個人的に授業内容の統一化という方向性に関しては、全面的に認めたくないというのが正直言っております。大学教育全体を見ても、今回書かせていただいたのですが、質保証と言った時にどうしても企業的な点数化方式のシステムが前面に出てくる。もちろん体系化は必要になると思います。最低限、「これはひどいだろ！」というのは無くしていくという、それをどうするかというリスクヘッジは必要だとしても、でもそこで全部画一化してしまうと、主体性を育てる多様性というか、自由度が無くなってしまったり、システム自体の寛容性が無いところに良い雰囲気は育たないだろう、というのが僕自身の中にはあります。

多分、これからもっと風当たりが強くなってくると思うのですね、統一的な形でやっていく方向性が強くなると。うちの大学とかは特にそうだと思います。その中で、自由度が担保できる場所をどう確保するかという課題の方が、僕の中で一番の課題ですね。だから、放っておくと逆に同じ教科書で同じ授業をやればいい、みたいな発想で、力がやってくるのが現状ですね。だから、質は保証できるのかもしれないけれど、本当の意味での表現の可能性という狙いどころに辿りつかないじゃないか。それでいいのだろうかというジレンマです。ただ、実際に「あ、やばいな、この先生。」と思う時ありますよね？「ん〜」と思いながら、でもそこら辺を攻撃して足並みを揃えちゃうのではなくて、寛容でありながら上手くいく方法はないのかなというジレンマで悩んだことはしばしばあります。

【小澤】ありがとうございます。

【塩沢】 非常勤で WRD を担当しております塩沢一平と申します。

プレゼンテーションコンテストのインターカレッジの方に出られているのとことですけれども、出ている学生さんは1年生の必修を受けている学生さんになるのでしょうか？

【師玉】 必修化されたのは今年からなので、今まで出てきた話は選択で履修していて、2年まで授業を受けていた学生のなかで「じゃ、出る人？」と言って手を挙げさせて、それで寄せ集めて出しているという感じでした。

【塩沢】 お聞きしたい意味合いは、他大学と他流試合をする、そこまでいけるレベルまでというのは、ものすごいことじゃないかなと考えたのですね。実は、私の本務校が似たようなレベルの学生で、WRD と似たような科目を持っていて、後期でプレゼンテーションを「どよ〜ん」とした雰囲気やっつけて、プレゼンをして質問が出てこないとか、そういう全員がアウェイの感じがして、教員も学生も。そこまで進んでいるそのすごさは一体何なのだろう。先生のキャラクターはよく分かって、あ、この人だったら付いていきたいなという感じは非常にするのですけれども、それ以外の面でどのくらいのレベルまでいっているのか、どうしたらいいのか、その辺のヒントをお聞きできたらと。

【師玉】 まず、質問できるような雰囲気になるかって、毎回クラスを持った時に賭けみたいところがあって、今回は上手くいくかなあとか。全然定石が無いので、学生の顔を見ながら雰囲気を見るのですが、失敗することもあるのです。上手くいかないクラスとかがあって、全然盛り上がりなくてとても陰悪なムードになっちゃうとか、そういった時もあります。クラスを複数持っているので、わりと上手くいく場合もあります。

もう一つはネタですね。プレゼンをやらせる時に、こっちで押し付けたネタでやると上手くいくのにすごい時間がかかるというのは、それは経験上あったりします。情報学部だと、かなりゆるいネタでも大丈夫です。今年インターカレッジで3位に入賞した子たちがいるのですが、彼等が個人発表でした内容というのは、

別々のクラスですけど、それぞれ「エロゲー」で発表しているのですね、女の子たちの前で。でも、それをちゃんと論理的に主張するのだったら各先生が評価するというのをやろうという雰囲気があって、だからどんなネタでも自分が表現したいネタで構わない。その代わり、するとなったらちょっと難しいかもしれない。例えば、サブカルチャーネタを扱うのは、実は、漱石で論文を書くよりも難しかったりするのですよね。論理自体がないところに、論理自体を作らなくてはいけなとか。その意味でいうと、彼等は、自分の好きなことをやったら、楽に、楽しくできるのかと思ったら、実はとても勉強しなくちゃいけなかったとか。でも自分の好きなことでそういった論理武装みたいなことをしていくというところに辿りつけると、何となく火がついていったりする時があるので、できるだけ学生たちの、表現にかきたてるようなテーマというのを許容しようとする努力はしていて、それは上手くいっているのではないかなという気がしているのですけれど。ただこれが良いかどうかというのは、時々、皆ここからツイッターでつぶやくのは止めろと規制を敷いて、ある学生の発表を聞かせる時もありますので何とも言えませんが。

という感じでよろしいでしょうか。すみません。

【塩沢】 ありがとうございます。

【勝又】 座ったままですみません。勝又あずさと申します。キャリアデザイン科目を担当しています。私の授業でもプレゼンテーションを取り入れております。貴重なお話をありがとうございました。「自己開示」や「ノビシロ」という部分は、私も共感でき、勉強になりました。

質問ですけれども、1年次から2年次、3年次と体系づけて、スタディスキル、文章表現技術、プレゼンテーション技術を教育していく、その授業について、具体的なお話をお聞かせいただきたいと思います。例えば、企画書とプレゼンテーションがどのようにつながって授業が展開されていくとか、あとは評価基準について、あるいは、授業は90分間だと思うのですが、どのような流れで進めているか、是非学ばせていただきたいと思います。以上です。

【師玉】 はい、ありがとうございます。

授業はなるべくリンクさせようとはしているのですが、例えば、聞き手の分析でいくと、それぞれ企画書で出てくる想定された聞き手というのが、状況的に違ってくるわけじゃないですか。社内の上司かもしれないし、クライアントかもしれないし。そういった形で、意識させるという役割があるのですけれど、若干、リンクしないよなとか思いながら「じゃ、今日はここで授業は終わって、あとは企画書コーナー。」とか言って、まるつきり分断しちゃう時もあります。ただ、トータルで考えると、自分でプレゼンを作る時に、想定でいいから自分で何か企画を立てたプレゼンを作ってもいいよ、ということでレポートはかなり自由に作らせます。データも自分で調べられないから、ある程度信憑性のある形で作るのなら作っちゃってもいいよと、そういうことも認めます。ただそれで困る時もある、例えば、仮面ライダーというのはバッタが元になっていますが、これをゴキブリにしたらどうか、ゴキブリを元にした仮面ライダーの提案というのをやってくれた学生がいました。数十ページに渡ってクロッキーかなんか詳細に描いてきて…、「お前のその努力は認めるけどねぇ…」とか言いながら評価に困ったことがあります。まあそれはちょっと突飛な例ですけど、なるべくテーマ的なところで自由度をもたせてリンクさせるようにはしています。

WRDの授業では、一昨年…、「教授チーム」が賞を取ったのは一昨年でしたっけ？ WRDプレゼンテーションコンテストで出た子たちが、大江戸温泉物語とか自由が丘スイーツフォレストの分析方法みたいなものを組み込んでプレゼン発表をしていたので、そういう使い方もあるのかなと思いながら、連関するかと思えばまるつきり分断される時も確かにあるので一概に言えないですね。

次に評価方法ですね。今年までは情報学部の「プレゼンテーション技術Ⅰ・Ⅱ」だけの開講だったのですね。これはなんでそんな言い方をするかというと、情報学部は縛りが無かったのです。だから最後に、プレゼンテーションのパワーポイントスライドと原稿で8割方、9割方の評価を出しても大丈夫だったのですけれど、今度の4月からは全学展開になるので変わってくると思います。全学展開になると、先ほどご質問でも出ましたが、統一化された評価方法が求められるようになってきます。それで、かなり点数化した形で出さなくちゃいけないので

これから6月にかけて地獄が待っている。それから、工科大には、いわゆる大学教育の縛り以外にジャビー (JABEE) 認定というのがあります。技術者教育の認定制度でして、この資格というのが、どんな評価方法で何点、どのように出したかというのを厳密に各科目ちゃんと出してないといけないという条件があるのです。で、それに加盟している学科が3学科もあって、全学展開になったらそれにも合わせなくちゃいけないという縛りも入ってくるので、形式的な統一性と包括的な評価をどう両立させるかというのは悩みどころです。今のところはレポートとかをアルファベットで付けたものを一旦点数化して、それを全部百点満点に換算して足し合わせて…、というような計算でやっているのですけど。

これはうちではやっていませんが、最近ルーブリック評価法というのがあってよく耳にするようになりましたし、取り入れたがっている方もいるようです。ですが、プレゼンコンテストをやるとよく分かると思うのですが、点数で評価すると本当のプレゼン評価って意外と実情とずれがあったりしますよね。そういった時にどうするのかという補整機能が、今のルーブリック評価法にないので、多分いずれ大学側はルーブリック評価法を取り入れろという感じで話が出てくるのでしょうか、それはちょっといやだなあ、と私自身は二の足を踏んでいる状態なので、これからの課題になると思います。すみません。

【勝又】 ありがとうございます。

【小河原】 文芸学部の WRD を担当させていただいております、小河原と申します。いつも手探りで授業に臨んでいますが、今日のお話は大変参考になりました。ありがとうございます。

「自信の無さの払拭」ということに関して質問させていただきたいのですが、これまで、学生さんが頑張ってプレゼンテーションをして、その後に「私、失敗しちゃった」と言って落ち込むときがありました。そのようなときに、また自信を持ってもらえるような方法がありましたらお教え下さい。

【師玉】 ここは失敗する場だということを、なるべく分かってもらうように伝えま

す。それでもやっぱり人前に立つのはきついで、ただ、私自身、今こうして話しているのをご覧になって分かるように決して話が上手な方ではないので、「この間、学会発表でさ、思いつきり失敗したぜ。」と自分の失敗ネタをとにかく話すようにはしています。そうすると、雰囲気として、「失敗というのはそんなに気にすることないんだよ。」という空気が作れたら大丈夫なのですけど。緊張した空気の中でやっていくと、もう発表したくないという雰囲気ができあがっちゃう時もクラスによってはあります。

非常にぶっちゃけた話でいくと、うちはオタク率が非常に高いのです。普通に言われているオタクはマイノリティですよ。ところが、うちの情報学部だと一般の世界ではマイノリティと言われているオタクがマジョリティで、「リア充」と呼ばれている普通の人たちは割と縮こまっている。一番偉そうにしているのが誰かというオタクちゃんたちで、中でも普通だったら世の中ではカミングアウトしない「やおい系」の女の子たちがいるのですが、この子たちがいつの間にか元気になっちゃって、率先してプレゼンをやるようになったりすることがあるのです。ただし、内容はBL (Boys Love) ですけど。けれども、そんな雰囲気が作れる時はいいのですが、「リア充」比率が上がってきたりするとバトル戦になってくるのですよ。お互いにけなし合って、すごい雰囲気で、「これ、どうしようもないや。俺でも守れないや。」という時もありました。だからそういう時は、「上手く慰められんけど、これは俺でも無理だよ。」という言い方はしてあげたりしますけど。

すみません。あまり生産的な答えではなくて。

【小河原】 ありがとうございます。

【阿部】 もう予定の時間がぼちぼち来ている感じですけども、他に先生方でご発言なざりたい方はいらっしゃいませんか？何か一言とかあればいかがでしょうか。

【塘】 質問ではなく感想です。我々が学生として学んだ30年前にも、プレゼン

テーションの演習がありました。そのプレゼンテーションの方法は、インタビュー風景をビデオ撮影し、それを編集して上映するというものでした(講演者と質問者は大学時代の同級生である)。

私は、今、2年生の授業にこの手法を取り入れています。具体的には、学生が夏休み期間に企業へインタビューに行き、その内容を学内のスタジオでプレゼンテーションを集録・編集し、上映するというものです。この方法のメリットは、自分の報告している姿をビデオで自ら確認できる点です。30年前と違い、最近はずっと低コストで、さらには携帯端末でも動画が撮れるようになっています。先ほどのお話にあった「人前で話すのは苦手な人もいる」という課題に対応するために、ビデオの技術をプレゼンテーションの授業に取り入れていくのもひとつの方法であると感じています。

また、お話の中でアクティブ・ラーニングという言葉も出てきました。最近、図書館の事務職員が、アメリカ、韓国など諸外国の図書館を見て回ったという話を聞いたことがあります。それによると、アメリカでは、今までの文章での報告あるいはレポート発表から、コピペのできないビデオを使った報告に移っているとのこと。そういう場面でも、映像によるプレゼンテーション技術を取り入れていくのも手かなと思います。

さらに、グローバル化した企業では、テレビ会議とか電話会議をはじめとするIT技術を積極的に活用しています。そのような機器を介したプレゼンテーション能力も大切だと思います。成城には映像を処理できる施設、設備もあるので、このあたりを念頭に置いたプレゼンテーション教育を是非実施していただきたいというのが感想です。

【阿部】 他にはよろしいでしょうか。感想でもなんでも結構ですけれどもいかがでしょうか…。もし、直接この場で言にくいという先生がいらっしゃいましたら、後ほど師玉先生に直接投げかけていただければと思います。

塘先生に最後まで読んでいただいたような感じになるかもしれませんが、今のビデオの話も、私立大学情報教育協会で私が出席している委員会で、コミュニケーション学に関するカリキュラムを作れ、みたいな話があったのですが、様々なメ

ディアが、そして道具が出てくる時に、それらのメディアを使ってコミュニケーションをとる、ビデオ会議とかじゃないですがそういうのをやる時に、例えばカメラを通して相手にどう見られているか、相手が自分の姿や発言をどう解釈するのかみたいな話を、ビデオなどのメディアを使うことによって相手の見られ方が変わってくるよ、とか、そういうことを実践しながら身につけなくてはいけないのですよねという話をしているのですが、これは情報教育の延長にある話だとも思います。そういう道具的なものをどう使いこなすかも、今後、問題として出てくるのでしょう。ただ、根本のところ、人前で話すとか、人前で緊張しないとか等の実践も大事ですし、それをどのように学生に教育するのかは、今日出てきたような話題に含まれるかなと思います。

もう一つは、さっきも勝又先生から話がありましたが、評価の仕方ですね。小河原先生もちょっとおっしゃっていましたが、成城大学の学生を見てると、私の見ている学生の中にはできないというか、怖いと言う子もいるのですけれど、結構「あ、だいたいこういう感じでこうやればいいんでしょ？」というような、ちょっと「なめてる」という言い方は変ですけど、これくらいだったら十分できるよ、と。例えば、プレゼンテーション・コンテストのビデオを見せると、今年の私の授業の学生なんか「これくらいは楽勝だよ。」というようなことを言って、まあ、実際本番に立つとボロボロだったりしますが、そういうのもいたりして。逆に、実際自信があったのに失敗するパターンも結構あると思うのですが、「失敗するのは当たり前なんだよ。」という前提でいろんなことをやらせると。それで、じゃ、どうしたらいいのと自分で物事を考えさせるのは結構あるのかなというのは、今のお話を伺って思いましたが、塘先生、評価という面では確かに難しいですよ？このプレゼンはいいいプレゼンなのかっていうのは。もちろん、それは考えていかなければと思います。

最後に、「評価」ということについて伺えればと思いますが、いかがでしょうか。

【師玉】 今年、うちでは同じ時間帯で4人の先生がやっていると、例えば文章表現技術を同時帯に4クラスやっていたりします。クラス対抗戦といっても実質的に全部のクラスが入らないので、2対2で分けてやっていったりするのです

けれど、学生たちに話したのは、できるだけ僕の評価だけじゃなくて他の先生の評価も聞いてくれて。これはプレゼンテーションにしても何にしてもそうだけれど、例えば企業プレゼンであっても、この企業は評価してもこの企業は評価しないというのはザラにある。それを受け入れるというよりも、そういう在り方をしているからこそ、聞き手も分析しなくちゃいけないし。

例えば、先ほどの神奈川産学チャレンジプログラムというのに出ると、企業の在り方というのが分かります。(提示しながら) こういった評価シートがやってくるわけですね。これはたまたま入賞したチームのものを取っておいたものですが、こちら辺が点数で出てきていて、一見、客観的な評価のように見えますが、同じ企業内であっても審査員によって正反対の評価をしていたりするのです。また、この企画プレゼンが入賞しても、多分別の企業だったら入賞しなかったよねということもあり得るし、それで、総体的に評価がずさんでもう二度とこの企業には出さないと考えた企業もいくつかあります。「この企業ははっきり言って許せない。」と、もう一人の先生と一緒に怒っていた記憶がありますが、そういう状況というのは全部学生に伝えて、それをどう判断してどうするかというのを考えさせるという形で、できるだけ私は提示するようにしています。

だから、学内のプレゼンコンテストでも、同じプレゼンを見ていても先生によって全然違うアプローチで評価してくれるので、それを聴き分けることの方が重要というか、学生には僕一人に染まってはいけないよとか言ったりしています。そんな多様性をできるだけ貪欲に求めて、いろんな人の意見を聞くようにという感じですよ。はい。

【阿部】 その辺は本当に連携が大事で、まさにお互いにどういう評価をするのかというのが、そういう場に出てこないといけないというのがあるわけですよ。実際出してみないと分からないというか、やらせてみていろんな人に見てもらって、というところですよ。その辺の話って、まさにどう読まれるのか、どう見られるのかが本当に主観的な部分になってくるので難しいとは思いますが。そこは教える側も少しインフォーマルに見て、余裕を持って、そう見られたのならそういうこともあるよねと思わなきゃいけないかもしれないし、逆に言えば、そ

う見られるのだったら、じゃ、その子たちにどう教えるかもこちらは取り入れないといけないというのは、今の話を聞いていて、私もこの辺は本当に難しいことだと思っています。自分の評価というか、「自分はこれで上手くいっているんじゃない？」と想着いても、違うように読み込まれることはしょっちゅうあるわけです。ですから、そこのところというのはまさに今日の師玉先生のお話の中で言うと、どのように連携するかという、最もインフォーマルなお考え、その幅の中でどう考えるかという話なのかなと、今思いました。

というわけで、本来の予定よりも、10分～15分ほど超過しました。進行の不手際で申し訳なく思います。たまたま年度末の開催ではありましたが、4月からまた新しい年度が始まるわけで、ここで師玉先生に伺ったことを思い巡らしながら、4月からの授業に活かせられたらといいかなと、そして、新しい学期に向けての切り替えというか、そういう機会になったかなと想着おります。

というわけで、本年度の公開FDワークショップ、この辺で終わりにしたいと思いますが、本日、年度末のお忙しい中、講師をお務めいただいた師玉先生に、皆さま拍手をもって感謝の意を示したいと思います。師玉先生、ありがとうございました。

※本稿は、2013年3月11日、成城大学3号館3階大会議室にて開催された「公開FDワークショップ'12表現教育の可能性」を紙上にて再現したものである。なお、講師を務められた師玉真理氏とコーディネーター・司会をつとめられた阿部勘一氏に本稿を校閲していただいた。 (編集委員会)